

## 蜘蛛流大工棟梁横田氏の鬼板絵様について

—横田家大工文書の研究（8）—

### Consideration on the Design Style of "Oniita" made by the Yokota Family, the Master Builder of the Kumo School

白井 裕泰\*  
Hiroyasu Shirai

#### 要約

蜘蛛流大工棟梁横田氏の鬼板絵様を分析した結果、以下のことを明らかにすることができた。横田氏の建築作品にみる鬼板は、資料数が少なく、その絵様の変遷を把握することは困難であったが、少なくとも雲水の意匠が主流であったことがわかる。しかし横田家大工文書における鬼板の資料数は比較的多く、これを分析すると、鬼板鱗の意匠は第1期に渦巻・流水および菊葉、第2期に雲水、第3期に渦若葉、第4期に再び雲水が主流であったことがわかる。また横田氏の鬼板を評価すれば、その意匠には独自性があまりみられず、公刊された大工雛形書を手本にして鬼板絵様をデザインしていたと考えることができる。

キーワード：蜘蛛流、大工棟梁、横田氏、鬼板、絵様

---

\* 住居学科

## 1. はじめに

横田氏は、東北地方において蜘蛛流と呼ばれる大工集団を形成し、江戸後期から明治期にかけて活発な建築生産を行った大工棟梁である。

本研究は、「蜘蛛流大工棟梁横田氏の絵様について」注1)の一連の分析に引き続き行うものであり、本論文は蜘蛛流大工棟梁横田氏が建築した作品にみられる鬼板絵様の変遷を体系的に把握することを目的としている。

また横田家大工文書の中で鬼板絵様図を基本資料として取り上げ、横田氏の建築作品における鬼板絵様と比較することによって、名称不明の絵様図がどの建築作品に用いられたかを特定できることを期待している。

さらには近世に公刊された木割書における鬼板絵様と比較することによって、横田氏の鬼板絵様の特色を明らかにする。

## 2. 木割書における鬼板絵様

横田氏の絵様を分析するにあたって、ここでは鬼板絵様を取り上げることにするが、江戸時代の代表的な木割書として須原屋茂兵衛蔵版の大工雛形書があり、その中で絵様を取り扱われているものとして表1のようなものがある注2)。ただし「大工絵様雑工雛形」は岐阜屋（正文堂）清七が版元であるが、参考資料としてここにあげておく。

表1 近世における主な大工雛形書

No.	絵様雛形書名	著者名	刊行年	備考
01	大匠雛形 彫物絵本	鈴木重春	正徳4年(1714)	全5冊の内2冊
02	匠家絵様集	官匠廣丹晨父	宝暦9年(1759)	全2冊
03	新撰雛形 五 絵様	小暮甚七	宝暦9年(1759)	全5冊の内1冊
04	大和絵様集	立川小兵衛	宝暦13年(1763)	全4冊
05	彫工雛形	二柳先生	文政10年(1827)	全1冊
06	当世いろは絵様集	奴長兵衛	天保5年(1834)	全2冊
07	大工絵様雑工雛形	落合大賀範国	嘉永3年(1850)	全2冊

ところで、麓和善氏他は「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」注3)において、鬼板絵様の変遷過程について次のように指摘している。

絵様の変遷はほとんど懸魚と同様で、初期の史料では、まず鱗の部分装飾化することから始まる。次いで宝暦9年刊の『新撰大工雛形五』では、鬼板本体が複雑な線形からなる新奇なものあらわれ、加えて宝暦13年刊の『大和絵様集』以後は、鬼板本体の肩や脚元内側に蔓股に見られたような渦付きの突起があるものも増えてくる。そして、文政10年刊の『彫工雛形』以後は、懸魚ほど多くはないものの、鬼板全体が具象模様で、左右非対称となったものも見えるようになる。

すなわち、近世における鬼板の変遷はほとんど懸魚と同様であり、『大匠雛形 彫物絵様』（正徳4・1714年～享保2・1717年）では「鱒が具象模様」であり、次いで『新撰大工雛形 五』（宝暦9・1759年）では「本体が複雑化」し、そして『大和絵様集』（宝暦13・

表2 木割書における鬼板絵様

No.	絵様雛形書名	鬼板位置	鬼板様式	鱒様式	備考
01	大匠雛形 彫物絵本 下	大棟	脚:入八双・流水	葉	獅子口、枠内格狭間
02		大棟	脚:無裝飾	葉	
03		大棟	脚:入八双・流水	流水	
04		大棟	脚:入八双・流水と渦	流水と渦	
05		唐破風棟	脚:入八双・菊葉	菊葉	
06		唐破風棟	脚:入八双・雲	雲	
07	匠家絵様集	唐破風棟	脚:雲	雲水	
08		唐破風棟	脚:突起2箇所		
09		唐破風棟	脚:入八双・流水、内に突起		
10		唐破風棟	脚:無裝飾、内に突起		
11		大棟	脚:入八双・葉	葉	
12		大棟	脚:渦文		
13		大棟	脚:両渦文・流水と渦	流水と渦	
14		唐破風棟	脚:入八双・流水		
15	新撰雛形	大棟	脚:二股・菊葉	菊葉	枠内に鬼面付 枠内に鬼面付
16		大棟	肩に突起付、脚:二股・雲水	雲水	
17		大棟	脚:二股・流水と波頭	渦と流水	
18		唐破風棟	脚:二股・雲水	雲水	
19		唐破風棟	肩に突起付、脚:両渦文	菊葉	
20	大和絵様集	大棟	脚:二股・両渦文・渦卷	渦と流水	獅子口、枠内格狭間 獅子口、枠内格狭間
21		大棟	脚:二股・雲水	雲水	
22		大棟	脚:入八双	渦若葉	
23		大棟	脚:入八双	雲水	
24		唐破風棟	肩:木鼻付、脚:二股・両渦文	渦若葉	
25		唐破風棟	肩:木鼻付、脚:二股	雲水	
26		大棟	脚:入八双	渦卷と流水	
27		大棟	脚:入八双	波頭と渦	
28		大棟	脚:入八双	渦文	
29		大棟	脚:入八双	流水	
30		大棟	脚:入八双	渦若葉	
31	大棟	脚:入八双	巴渦若葉／渦若葉		
32	大棟	脚:入八双	渦文／渦と渦若葉		
33	大棟	脚:入八双	雲		
34	大棟	脚:入八双	雲		
35	大棟	脚:入八双	雲		
36	大棟	脚:入八双	雲		
37	大棟	脚:入八双	雲		
38	大工絵様雑工雛形	大棟	脚:入八双	雲	脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型 脚先鱒一体型
39		大棟	脚:入八双	雲	
40		大棟	脚:入八双	雲水	
41		大棟	脚:入八双	雲水・白兔	
42		大棟	脚:入八双	渦文・渦若葉	
43		大棟	脚:入八双	渦若葉	
44		大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉	
45		大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉	
46		大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉	
47		大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉	
48		大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉	
49	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
50	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
51	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
52	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
53	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
54	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
55	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
56	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
57	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
58	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
59	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
60	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
61	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
62	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
63	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
64	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
65	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
66	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
67	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
68	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
69	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
70	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
71	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
72	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
73	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
74	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
75	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
76	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
77	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
78	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
79	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
80	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
81	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
82	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
83	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
84	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
85	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
86	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
87	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
88	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
89	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
90	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
91	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
92	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
93	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
94	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
95	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
96	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
97	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
98	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
99	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		
100	大棟	脚:入八双	渦文／渦若葉		

1763年)では「本体の肩や脚元に渦付突起がつく」。さらに『彫工雛形』では「具象模様で左右非対称」のものがあらわれる。

以上の指摘を踏まえて、各大工雛形書における鬼板をみることにする。鬼板絵様を詳細に検討した結果、その特徴を簡単にまとめたのが表2である。

## 2-1 鬼板絵様の分類

木割書における鬼板を分類するには、まず鬼板が取り付けられる位置と鬼板の様式(意匠およびその主題)に分けて考えなければならない。

鬼板は取り付けられる位置によって、大棟鬼板、下り棟または隅棟鬼板、向拝唐破風棟鬼板に分けられる。

鬼板の様式をみると、鬼板のみ、鬼板に鱗がつく、鬼板と鱗が一体化しているといった3つのタイプに分けることができる。

鬼板本体の形態をみると、鬼板と獅子口に分けられ、鬼板はさらに肩に渦付木鼻様の突起があるものとなないものに分けられる。また脚元は入八双形のもの(茨様の切り込みがあるものとなないもの)に分けられる。

鱗の意匠をみると、抽象的な絵様、植物系の菊葉、動物系の龍・白兔、天象系の渦・波頭・雲・流水・雲水、折衷系の渦若葉などがみられる。

さらに鬼板と鱗が一体化しているものには、鱗の脚元部分が絵様化したものと、左右非対称形の全体が具象的な意匠があり、具象的な意匠として雲龍と雲水などがみられる。懸魚に比べて意匠の種類が少ない。

## 2-2 鬼板絵様の変遷

鬼板の変遷は、一般的な鬼板に鱗が付いたものから鬼板と鱗が一体化したものへと大きく変遷したと考えられる。

『大匠雛形』(1714年、図2-1~6参照)では、一般的な鬼板(肩に茨様の切り込みがあり、脚元は外にまるく開いて先端で円弧が反転した形)に鱗が付いたものと、脚元を入八双形として従来の脚先と鱗を一体化させたものがみられる。鱗は流水、渦・流水、菊葉、雲水などがみられる。また鬼板の形態には、一般的な鬼板、枠内が格狭間となっている獅子口、腰に反曲があり脚元内側に突起がある鬼板などのタイプがみられる。

『匠家絵様集』(1759年、図2-7~14参照)では、典型的な鬼板の他に、鬼板の肩に切り込みのないものや、腰に反曲がみられるもの、脚元の内側に突起をつけたものなど多様である。鱗には雲水、菊葉などがみられる。この段階ではまだ鬼板脚先と鱗が一体化したものはあまりみられない。

『新撰雛形』(1759年、図2-15~19参照)では、鬼板本体に絵様系の新奇な意匠があら

大匠雛形（正徳4・1714年）

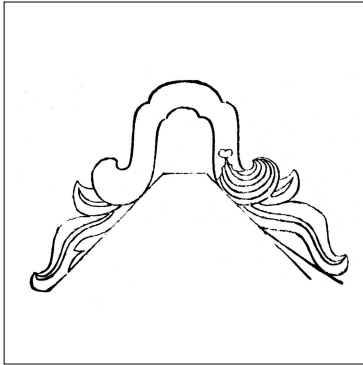


図 2-1

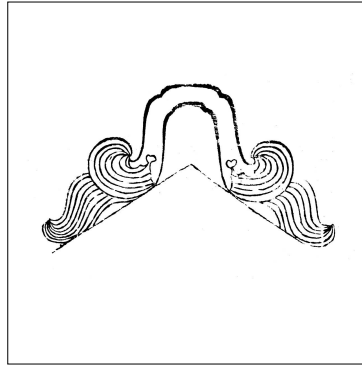


図 2-2

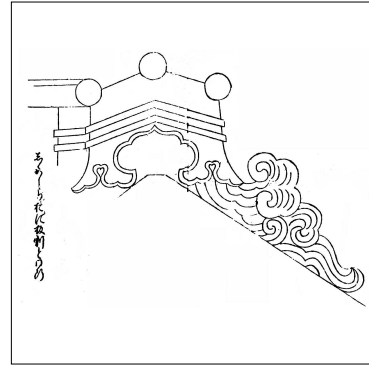


図 2-3

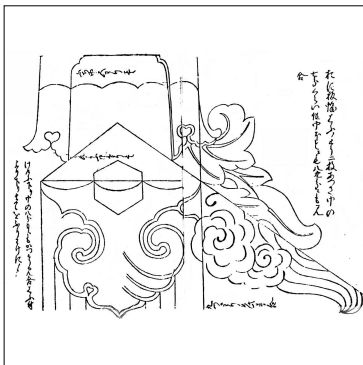


図 2-4



図 2-5

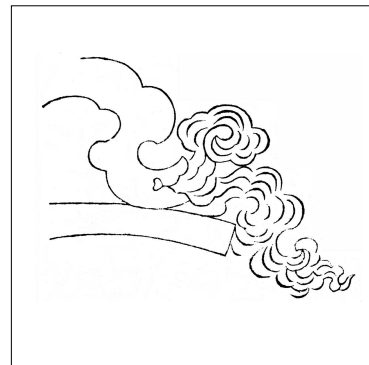


図 2-6

匠家絵様集（宝暦9・1759年）

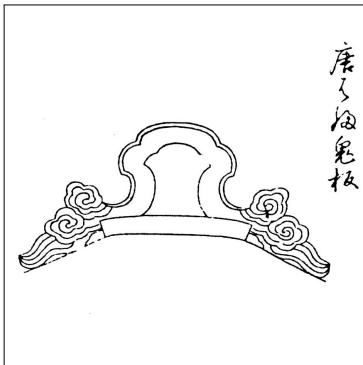


図 2-7

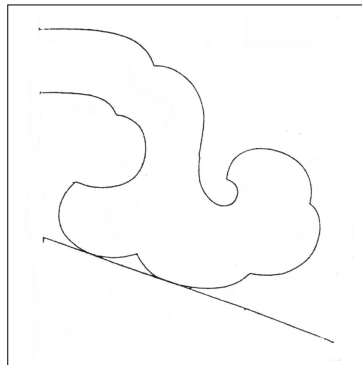


図 2-8

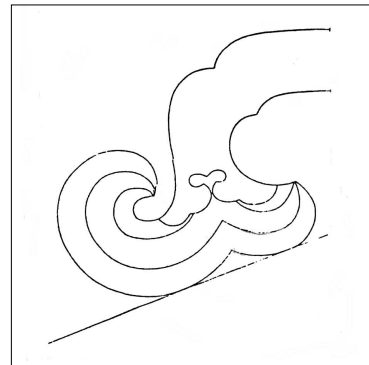


図 2-9

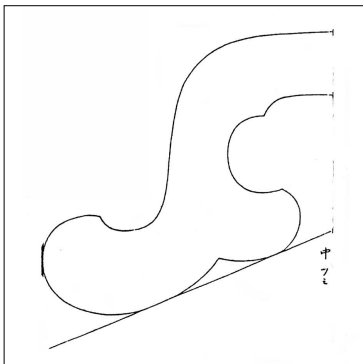


図 2-10

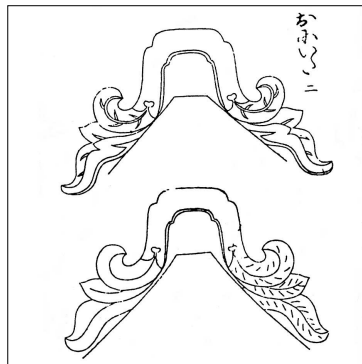


図 2-11

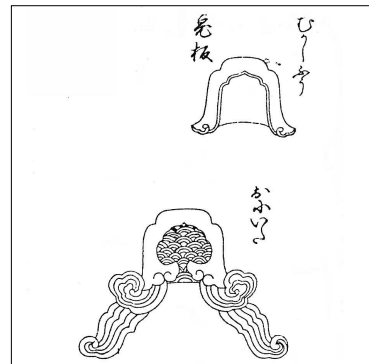


図 2-12

新撰雛形 (宝暦9・1759年)

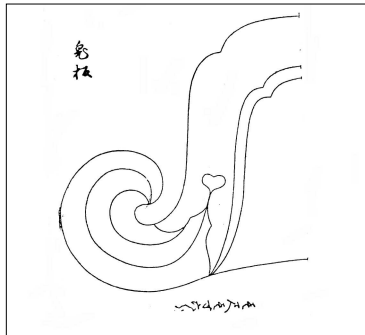


図 2-13

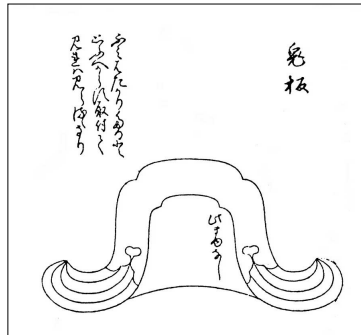


図 2-14

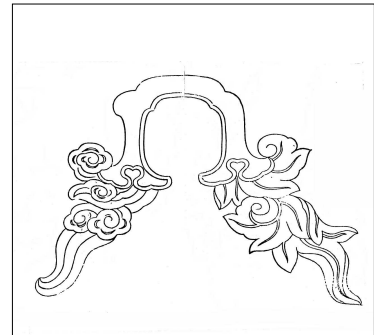


図 2-15

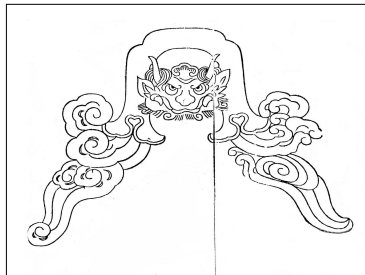


図 2-16

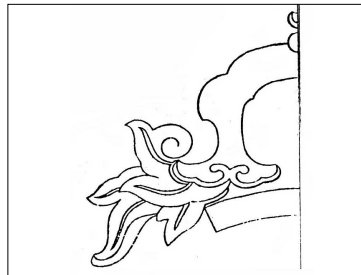


図 2-17

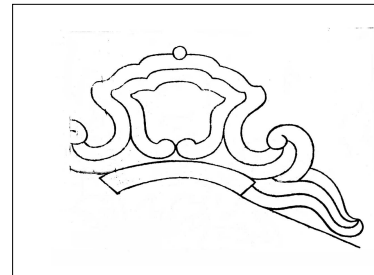


図 2-18

大和絵様集 (宝暦13・1763年)

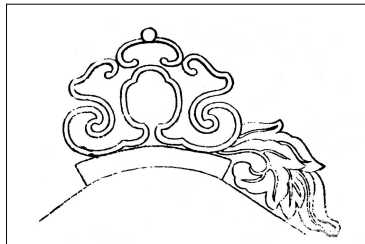


図 2-19

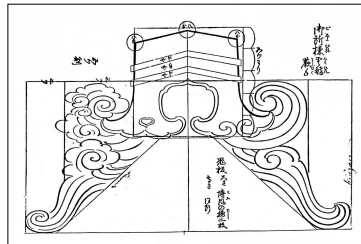


図 2-20

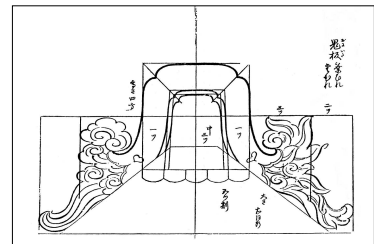


図 2-21

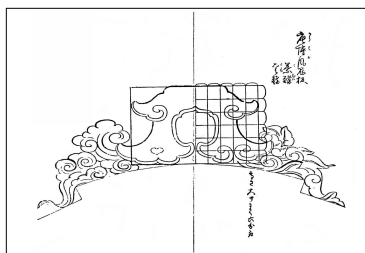


図 2-22

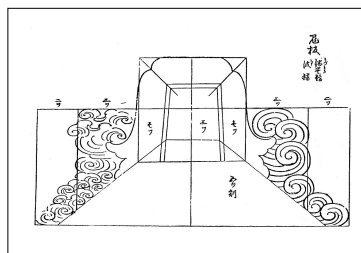


図 2-23

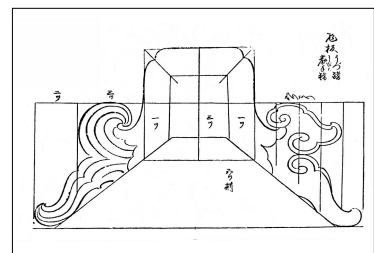


図 2-24

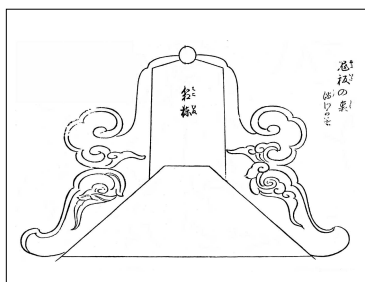


図 2-25

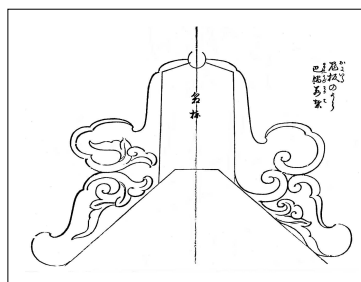


図 2-26

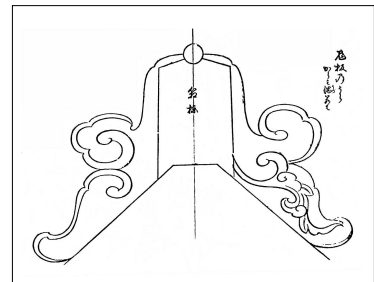


図 2-27

彫工雛形 (文政10・1827年)

当世いろは絵様集(天保5・1834年)

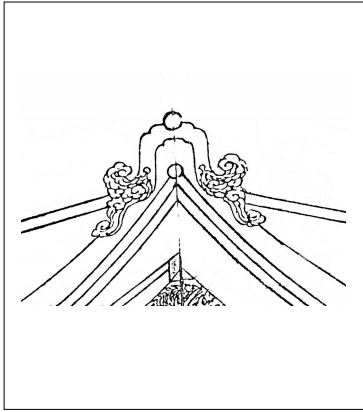


図 2-28

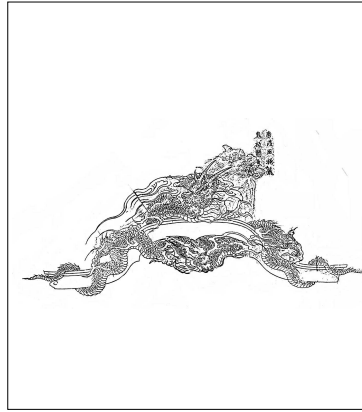


図 2-29

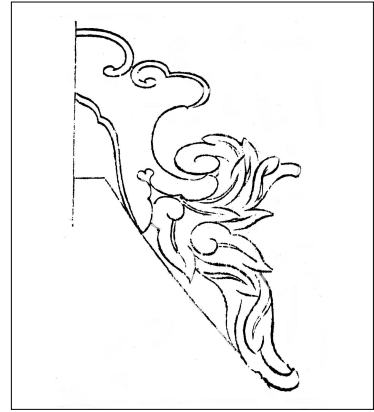


図 2-30

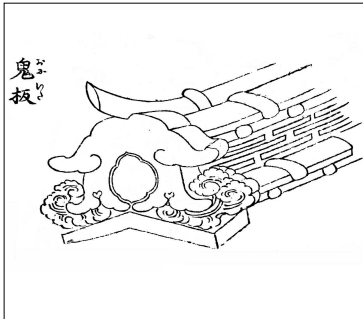


図 2-31

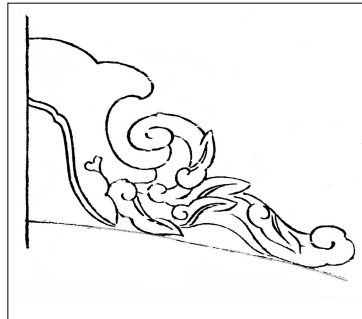


図 2-32

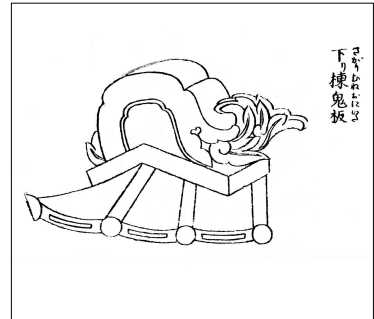


図 2-33



図 2-34

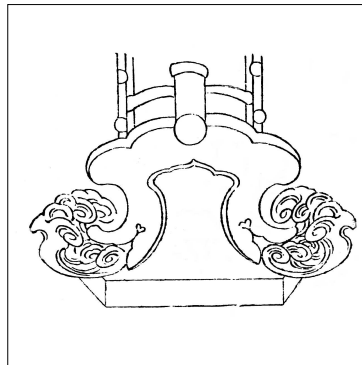


図 2-35

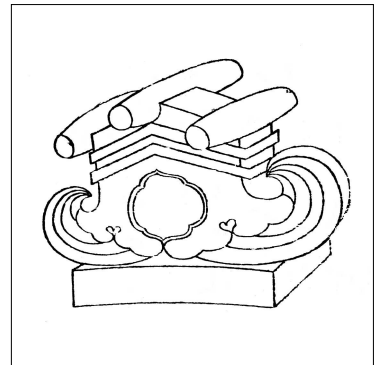


図 2-36

大工絵様雑工雛形(嘉永3・1850年)

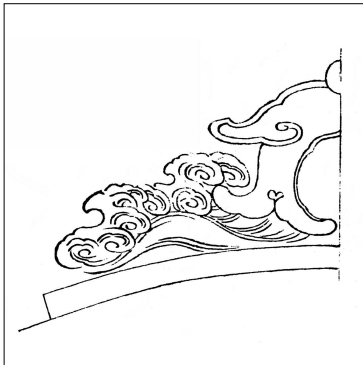


図 2-37

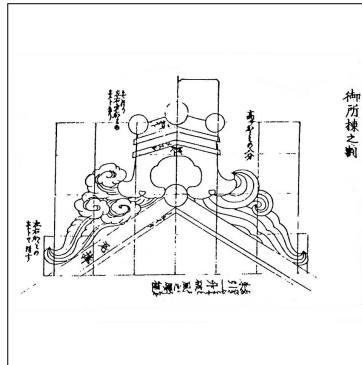


図 2-38

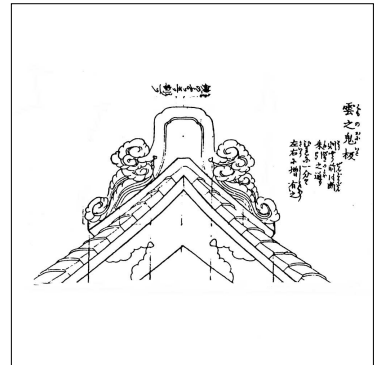


図 2-39

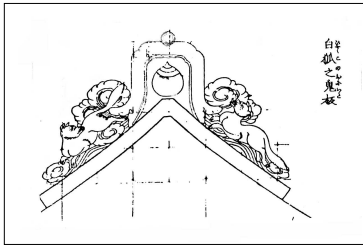


図 2-40

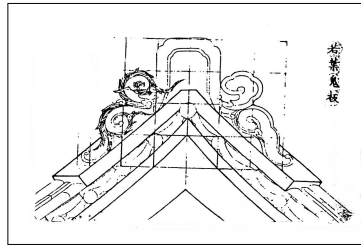


図 2-41

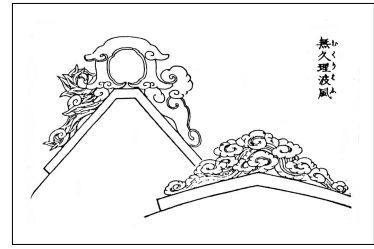


図 2-42

図 2-43

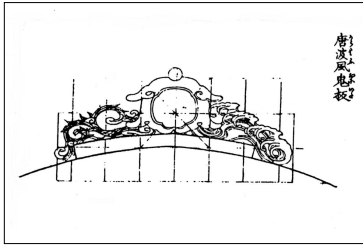


図 2-44

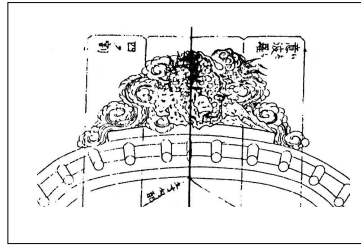


図 2-45

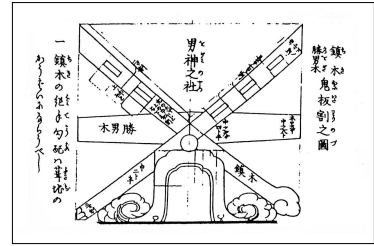


図 2-46

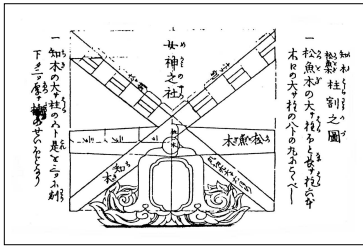


図 2-47

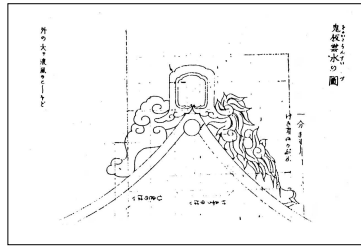


図 2-48

われた (図 2-18、19参照)。鱗はより複雑な菊葉、雲水、波頭・流水などがみられる。

『大和絵様集』(1763年、図 2-20~27参照)では、鬼板脚先と鱗が一体化したものが主流となった。鱗の意匠に渦・流水、雲水、渦若葉、渦巻き、波、絵様などがみられ、多様な意匠となっている。ここにおいてほぼすべての鱗の意匠が出揃った感がある。

『彫工雛形』(1827年、図 2-28・29参照)では、例は少ないが、はじめて「捲龍」といった具象的意匠をもつ鬼板鱗一体型で、左右非対称のものがあらわれた (図 2-29参照)。

『当世いろは絵様集』(1834年、図 2-30~37参照)では、鬼板の肩に木鼻様の突起をもち、脚先と鱗が一体化したものが一般的となった。

『大工絵様 雑工雛形』(1850年、図 2-38~48参照)では、これまでの意匠を集大成しようとする意図がみられる。鬼板は脚先と鱗を一体化したものが一般的である。鱗の意匠では渦若葉、波頭に新奇さを感じられる (図 2-44参照)。また左右非対称の鬼板鱗一体型のものとして、雲水 (図 2-43参照)、雲龍 (図 2-45参照) の意匠がある。

このように鬼板は、鬼板鱗付加型から鬼板脚先鱗一体型へ、さらに鬼板鱗一体型へと大きく変化した。『新撰雛形』では鬼本体の新奇なデザインがみられ、『大和絵様集』では鱗の多様性がみられ、『雑工雛形』では全般的に鬼板の優れた意匠を指摘することができる。



### 3. 横田氏の建築作品にみる鬼板絵様

横田氏が手掛けた建築作品にみられる鬼板絵様について詳細にみると、以下のようになる。

#### ①菅谷神社本殿（寛保2・1742年）

図3-1参照

横田家文書にみる鬼板は、肩に茨様の切り込みがあり、猪の目付き入八双形の脚元の先は渦巻となっている。鱗は渦巻・流水でデザインされている。

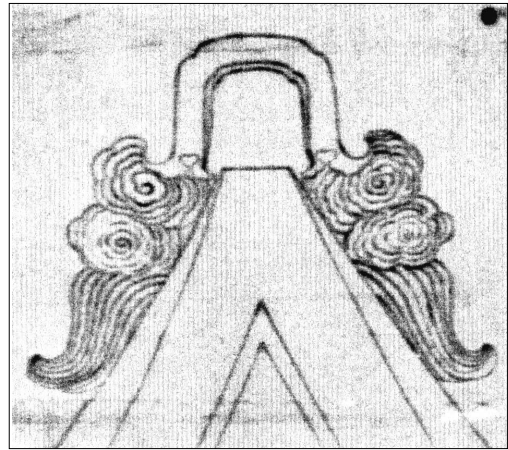


図3-1 菅谷神社本殿（寛保2・1742年）  
（横田家文書より）

#### ②神俣八幡神社本殿（延享4・1747年）

図3-2参照

鬼板の肩には茨様の切り込みがあり、猪の目付き入八双形の脚元の先は流水・波頭となっている。鱗は菊葉でデザインされている。鬼板は木製であり、鬼板枠内には金属製の桐紋章が付けられている。

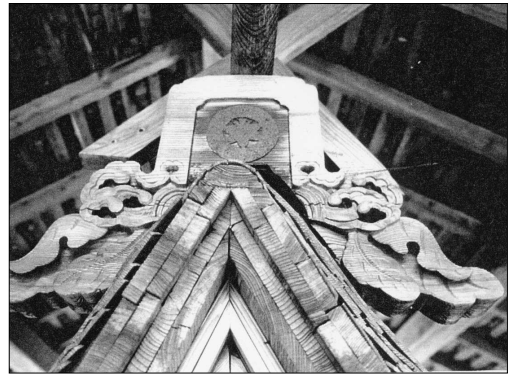


図3-2 神俣八幡神社本殿（延享4・1747年）

#### ③普賢寺山門（寛延2・1749年）

図3-3-1、2参照

鬼板の肩には茨様の切り込みがあり、両渦文付きの二股形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗は菊葉が渦を巻いたデザインとなっている。鬼板枠内に卍文が付けられている。横田家文書にみる鬼板は肩に茨様の切り込みがあり、猪の目付き入八双形の脚元の先および鱗は流水となっている。したがってこの鬼板は後世に取り替えられたものであろう。



図3-3-1 普賢寺山門（寛延2・1749年）

#### ④剛叟寺本堂（寛政4・1792年）

図3-4-1、2参照

横田氏による鬼板の肩の切り込みははっきりせず、花卉形猪の目付き二股形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗は雲水の意匠であり、鬼板腰位置まで盛り上がっている。

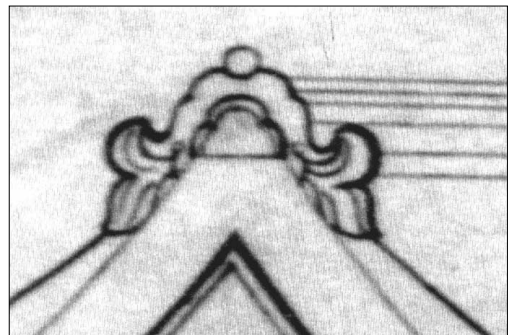


図3-3-2 普賢寺山門（寛延2・1749年）  
（横田家文書より）

る。現在の鬼板は鱗が雲水の意匠で横田氏のものと同じであるが、彫りが深いことと、肩に木鼻様の突起が付いている点が異なる。

⑤湯沢神社本殿（寛政9・1797年）

図3-5参照

横田家文書にみる鬼板の肩は、茨様の切り込みがあり、猪の目付き二股形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗は雲水の意匠である。

⑥神俣八幡神社拝殿（文化元・1804年）

図3-6-1、2参照

大棟鬼板の肩に茨様の切り込みがあり、猪の目付き二股形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗は雲水の意匠であり、鬼板腰位置まで盛り上がっている。唐破風棟の鬼板は肩に木鼻様の突起が付いている。鱗は大棟鬼板と同様である。

⑦菅船神社本殿（文化14・1817年）

図3-7-1、2参照

鬼板は木製であり、肩に茨様の切り込みがあり、猪の目付き二股の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗は菊葉の意匠であり、横田家文書の鬼板と同様である。

⑧蛭沢稲荷神社本殿（文政2・1819年）

図3-8参照

鬼板の肩には茨様の切り込みがあり、猪の目付き二股形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗は雲水の意匠であり、鬼板腰位置まで盛り上がり、かつ彫りが深い。鬼板枠内には十曜の紋章が付いている。この鬼板は後世に取り替えられたものであろう。

⑨龍穩院本堂（天保2・1831年）

図3-9参照

鬼板は獅子口形であり、猪の目付き二股



図3-4-1 剛叟寺本堂（寛政4・1792年）



図3-4-2 剛叟寺本堂（寛政4・1792年）

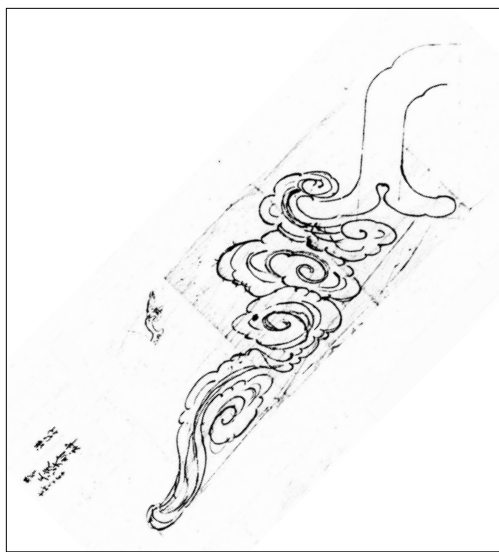


図3-5 湯沢神社本殿（寛政9・1797年）



図3-6-1 神俣八幡神社拝殿  
(文化元・1804年)



図3-6-2 神俣八幡神社拝殿 (文化元・1804年)

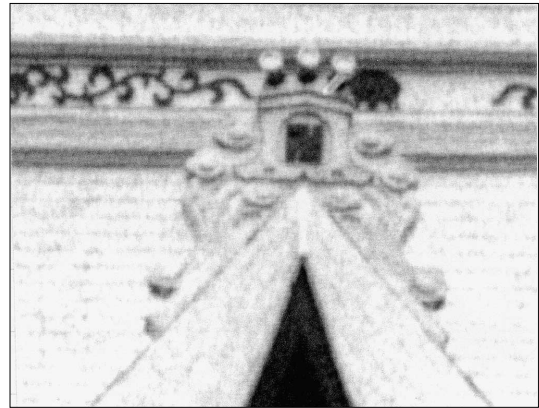


図3-9 龍穩院本堂 (文政11・1828年)



図3-7-1 菅船神社本殿 (文化14・1817年)



図3-7-2 菅船神社本殿 (文化14・1817年)  
(横田家文書より)

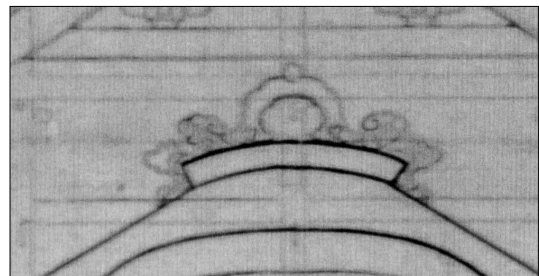
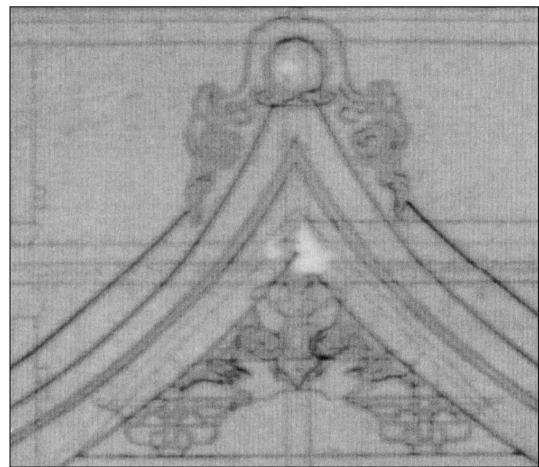


図3-10 木幡山護摩堂 (天保15・1844年)  
(横田家文書より)



図3-8 蛭沢稻荷神社本殿 (文政2・1819年)



図3-11-1 子鋤倉神社本殿 (嘉永6・1853年)

形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗の意匠は雲水となっていて、上部は獅子口の腰位置まで盛り上っている。鱗全体の成と幅が大きく、豪華なものである。獅子口枠内には卍紋が付いている。

⑩木幡山護摩堂（天保15・1844年）

図3-10参照

横田家文書にみる鬼板は、大棟・唐破風棟の鬼板とも、肩に茨様の切り込み、脚元は猪の目付き二股形であり、脚先と鱗が一体化して、雲水の意匠となっている。

⑪子歙倉神社本殿・旧拝殿（嘉永6・1853年）

図3-11-1、2、3参照

本殿の鬼板の肩に茨様の切り込みがあり、猪の目付き二股形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗の意匠は雲水である。横田家文書にみる鬼板の鱗は、渦若葉となっているので、この鬼板は後世に取り替えられたものであろう。旧拝殿の鬼板の肩には切り込みがなく、逆に尖っていて、他に例を見ない。脚先鱗とも菊葉になっている。この鬼板は後世に取り替えられたものであろう。

⑫満福寺鐘楼（万延2・1861年）

図3-12-1、2参照

鬼板の肩には茨様の切り込みがあり、猪の目付き二股形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗上部は腰位置まで渦紋が巻き込み、下部は流水でデザインされている。横田家文書では鱗が雲水となっているので、この鬼板は後世に取り替えられたものであろう。

⑬大日寺本堂（文久元・1861年）

図3-13参照

横田家文書にみる鬼板の肩には茨様の切

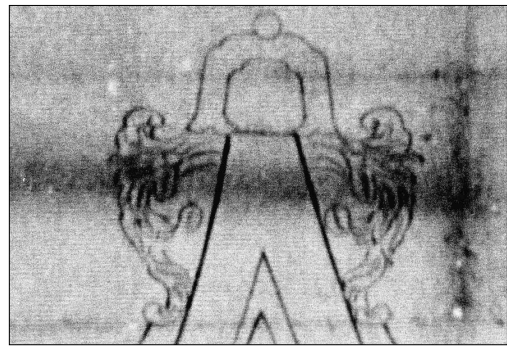


図3-11-2 子歙倉神社本殿（横田家文書より）



図3-11-3 子歙倉神社旧拝殿（嘉永6・1853年）



図3-12-1 満福寺鐘楼（万延2・1861年）

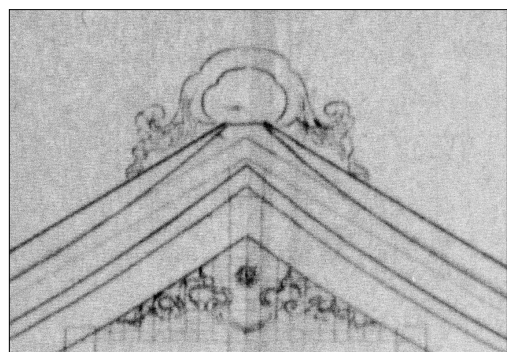


図3-12-2 満福寺鐘楼（横田家文書より）

り込みがあり、猪の目付き二股形の脚の先に鱗が一体化して付いている。鱗は雲水の意匠となっている。

⑭駒形神社本殿（明治6・1873年）

図3-14参照

鬼板の肩には茨様の切り込みがあり、猪の目付き二股形の脚元の先に鱗が一体化して付いている。鱗は渦若葉の意匠となっていて、横田家文書の鬼板と同様である。

⑮鹿島神社拝殿（明治16・1883年）

図3-15-1、2参照

鬼板の肩には茨様の切り込みがあり、猪の目付き二股形の脚元の外側に鱗が一体化して付いている。鱗上部は腰位置まで盛り上り、雲水の意匠となっている。鬼板枠内には巴紋が付いている。横田家文書にみる鬼板と比較すると、鱗の絵様は表現されていないので比較できないが、全体形は良く似ている。

⑯熊倉神社本殿（明治21・1888年）

図3-16-1、2参照

鬼板の肩には茨様の切り込みがあり、脚元は猪の目付き二股形となっていて、外側の脚先が渦を巻いている。鱗はその下に付き、渦巻・流水の意匠となっている。鬼板枠内には桐紋が付いている。横田家文書にみる鬼板鱗は雲水の意匠であり、この鬼板は後世に取り替えられたものであろう。

⑰宇佐八幡神社拝殿（明治23・1890年）

図3-17-1、2参照

大棟および唐破風棟の鬼板の肩には木鼻様の突起が付き、脚元は猪の目付き二股形で脚が長く伸びている。鱗の上部は鬼板の腰位置まで盛り上り、雲の意匠となっている。鬼板枠内には菊紋が付いている。

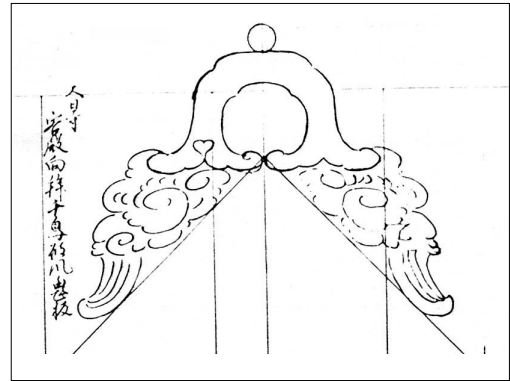


図3-13 大日寺本堂（文久元・1861年）  
（横田家文書より）

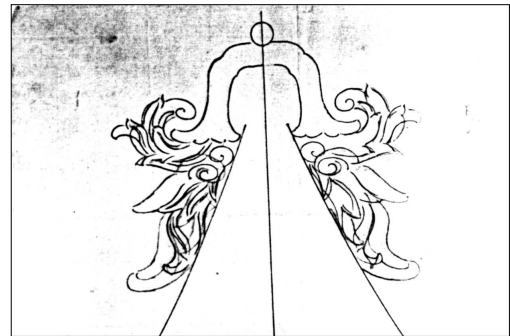


図3-14 駒形神社本殿（明治6・1873年）  
（横田家文書より）



図3-15-1 鹿島神社拝殿（明治16・1883年）

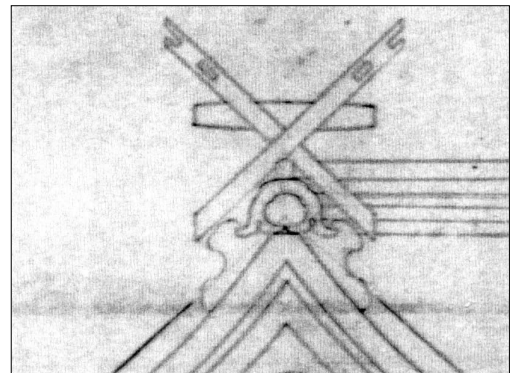


図3-15-2 鹿島神社拝殿（横田家文書より）



図3-16-1 熊倉神社本殿 (明治21・1888年)

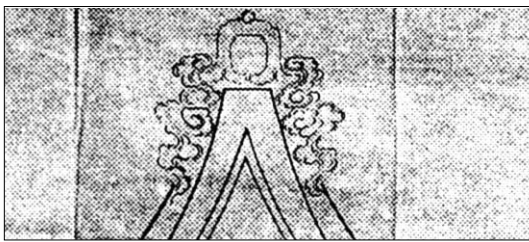


図3-16-2 熊倉神社本殿 (横田家文書より)

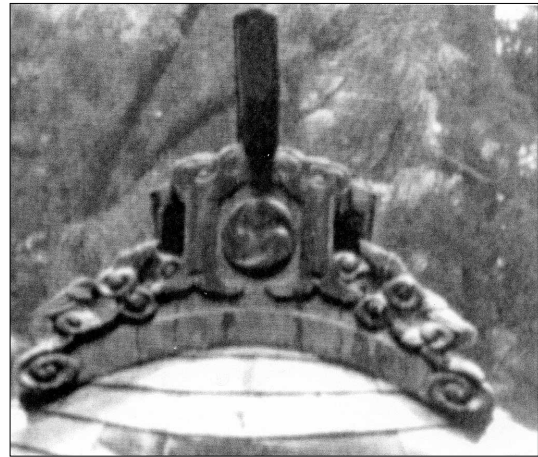


図3-18-1 熊倉神社拝殿 (明治25・1892年)

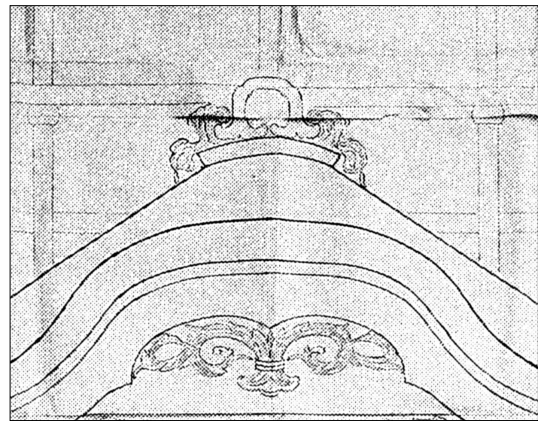


図3-18-2 熊倉神社拝殿 (横田家文書より)



図3-17-1 宇佐八幡神社拝殿 (明治23・1890年)



図3-17-2 宇佐八幡神社拝殿 (明治23・1890年)



図3-19 古峰神社拝殿 (明治31・1898年)

⑱熊倉神社拝殿（明治25・1892年）

図3-18-1、2参照

鬼板の肩には木鼻様の突起が付き、脚元は猪の目付き二股形となっている。鱗は脚の外側に付き、雲の意匠で、鬼台の両端を包み込んでいる。鬼板枠内には巴紋が付いている。横田家文書にみる鬼板鱗は雲水の意匠であり、この鬼板は後世に取り替えられたものである。

⑲古峰神社拝殿（明治31・1898年）

図3-19参照

鬼板の肩には木鼻様の突起が付き、脚元は猪の目付き二股形となっている。鱗は雲水の意匠であり、上部は腰位置まで盛り上がり、下部は鬼台両端に巻き込んでいる。

3-1 鬼板絵様の変遷

横田氏が手掛けた建築作品にみられる鬼板絵様の特徴をまとめたものが表3である。

表3 横田氏の建築作品にみる鬼板絵様

No.	建 物 名	建 築 年 代	鬼板位置	鬼板様式	鱗 様 式	備 考
01	菅谷神社本殿	寛保2・1742年	大棟		渦巻・流水	後補 図面より
02	神俣八幡神社本殿	延享4・1747年	大棟	脚：入八双・渦巻	菊葉	
03	普賢寺山門	寛延2・1749年	大棟	脚：二股両渦文付	渦巻・菊葉	後補 図面より
			大棟	脚：入八双・流水	流水	
04	剛叟寺本堂	寛政4・1792年	唐破風棟	脚：二股・雲	雲	
05	湯沢神社本殿	寛政9・1747年	大棟	脚：二股・雲	雲水	図面より
06	神俣八幡神社拝殿	文化元・1804年	大棟	脚：二股・雲	雲水	
			唐破風棟	肩：木鼻付、脚：二股・雲	雲水	
07	菅船神社本殿	文化14・1817年	大棟	脚：二股	菊葉	図面より
08	蛭沢稲荷神社本殿	文政2・1819年	大棟	脚：二股・雲	雲水	
09	龍穩院本堂	文政11・1828年	千鳥棟	脚：二股	雲水	獅子口、枠内格狭間
10	木幡山護摩堂	天保15・1844年	大棟	脚：二股渦文付	渦若葉	図面より
			唐破風棟	脚：二股	雲水	図面より
11	子歙倉神社本殿	嘉永6・1853年	大棟	脚：二股	雲水	後補
	旧拝殿		大棟	脚：二股	渦若葉	図面より
			唐破風棟	脚：入八双・菊葉	菊葉	後補
12	満福寺鐘楼	万延2・1861年	大棟	脚：二股・渦	流水	後補
			大棟	脚：入八双	雲水	図面より
13	大日寺本堂	文久元・1861年	大棟	脚：二股	雲水	図面より
14	駒形神社本殿	明治6・1873年	大棟	脚：二股・渦若葉	渦若葉	図面と一致
15	鹿島神社拝殿	明治15・1882年	大棟	脚：二股	雲水	後補
			大棟	脚：二股	渦若葉	図面より
16	熊倉神社本殿	明治21・1888年	大棟	脚：二股	渦巻・流水	後補
			大棟	脚：二股	雲水	図面より
17	宇佐八幡神社拝殿	明治23・1890年	大棟	脚：二股	雲	
			唐破風棟	肩：突起付、脚：二股	雲水	
18	熊倉神社拝殿	明治25・1892年	唐破風棟	肩：木鼻付、脚：二股	雲	後補
			唐破風棟	脚：二股	雲水	図面より
19	古峰神社拝殿	明治31・1898年	唐破風棟	肩：木鼻付、脚：二股	雲水	

この表を参考にして横田氏の鬼板絵様の変遷を概観すると以下ようになる。

- 1) 横田家文書によると菅谷神社本殿（寛保2・1742年）鬼板鱗は渦巻・流水、普賢寺

山門（寛延2・1749年）の鬼板鰭は流水の意匠となっている。また神俣八幡神社本殿（延享4・1747年）の大棟鬼板は脚先が波、鰭が菊葉の意匠であり、菅船神社本殿（文化14・1817年）の大棟鬼板の鰭は菊葉となっていて、これらが第1期のデザインの主流である。

- 2) 剛叟寺本堂（寛政4・1792年）、湯沢神社本殿（寛政9・1797年）の鬼板は脚先が鰭と一体化して雲水となっていて、これが第2期のデザインの主流である。
- 3) さらに子鋏倉神社本殿（嘉永4・1851年）や駒形神社本殿（明治6・1873年）の鬼板のように、幕末から明治初期の第3期は渦若葉が主流となり、その後再び雲水の意匠が主流となった。
- 4) 鬼板の肩に木鼻様の突起が付いているのは、神俣八幡神社拝殿向拝鬼板（文化元・1804年）、宇佐八幡神社拝殿向拝鬼板（明治23・1890年）、古峯神社拝殿向拝鬼板（明治31・1898年）のみであり、その他のものは茨様の切り込みとなっている。
- 5) 鬼板の脚元は、神俣八幡神社本殿および普賢寺山門（横田家文書より）が古式の入八双形であり、それ以外のものは大きく横に開いた二股形となっている。特に宇佐八幡神社拝殿向拝鬼板は脚先が長く伸び、特徴的である。
- 6) 鬼板の鰭のうち、龍穩院本堂（天保2・1831年）や鹿島神社拝殿（明治15・1882年）、宇佐八幡神社拝殿のものは、鬼板の腰位置まで盛り上がっていて、全体として大柄な鬼板となっている。

このように、横田氏の建築作品にみられる鬼板の鰭は、残存数が少ないのではっきり断定はできないが、雲水のデザインが主流であり、懸魚ほどの多様性はみられないといえよう。

### 3-2 横田氏の鬼板と木割書における鬼板との比較

木割書における鬼板の脚元は、匠家絵様集（宝暦4・1754年）までは入八双形であるが、新撰雛形（宝暦9・1759年）以降は二股形（1箇所のみ切り込み付き）が主流となっていく傾向がみられるが、横田氏の鬼板にも同様な現象がみられる。

神俣八幡神社拝殿鬼板（文化元・1804年、図3-6-1、2）および熊倉神社拝殿鬼板（明治25・1892年、図3-18-1）の肩にみられる木鼻様の突起は、当世いろは絵様集（天保5・1834年）の鬼板（図2-30）に似ている。

龍穩院本堂向拝鬼板（文政11・1828年、図3-9）は獅子口形であり、大和絵様集（宝暦13・1763年）の鬼板（図2-20）に似ている。

横田氏の一般的な鬼板の雲鰭は、大和絵様集の雲鰭（図2-20~22）に似ているといえよう。

このように横田氏の鬼板の意匠には、オリジナルなデザインはあまりみられず、おそらく木割書にみられる意匠をもとにデザインしたものと考えられる。



#### 4. 横田家大工文書にみる鬼板絵様

横田家大工文書における鬼板絵様は33点あるが、このうち文書に建物名が記入されていたことから名称が判明しているのは、9点にすぎず、8点の名称を推定した。

横田氏の建築作品にみられる鬼板は、作品の残存数が少なく、残念ながらはっきりした絵様の変遷を把握することができなかった。そこで横田家大工文書において建物名が判明したものとの比較によって、同書にみる鬼板絵様の変遷を推定し、時代順に並べたものが表4である。

表4 横田家大工文書にみる鬼板絵様

No.	建物名	建築年代	鬼板位置	鬼板様式	鱗様式	備考
01	菅谷神社本殿	寛保2・1742年	大棟	脚：入八双・渦巻	渦巻・流水	推定
02	普賢寺山門	寛延2・1749年	大棟	脚：入八双・流水	流水	推定
03	不明		大棟	脚：入八双・流水	流水	薬医門
04	不明		大棟	脚：入八双・流水	流水	方五間仏殿
05	不明		大棟	脚：入八双・流水	流水	菅谷神社本殿に類似
06	不明		大棟	脚：入八双・流水	流水	菅谷神社本殿に類似
07	不明		大棟	脚：入八双・流水	流水	菅谷神社本殿に類似
08	湯沢神社本殿	寛政9・1797年	大棟	脚：二股・雲	雲水	判明
09	不明		大棟	脚：二股・雲	雲水	湯沢神社本殿に類似
10	不明		大棟	脚：二股・雲	雲水	湯沢神社本殿に類似
11	不明		大棟	肩：木鼻付、脚：二股・雲	雲水	湯沢神社本殿に類似
12	菅船神社本殿	文化14・1817年	大棟	脚：二股・菊葉	菊葉	判明
13	木幡山護摩堂	天保15・1844年	大棟	脚：二股・雲	渦若葉	判明
14	木幡山護摩堂	天保15・1844年	大棟	脚：二股・雲	流水	判明
15	子歙倉神社本殿	嘉永4・1851年	大棟	脚：入八双	渦若葉	推定
16	満福寺鐘楼	万延2・1861年	大棟	脚：入八双	雲水	推定
17	満福寺鐘楼	万延2・1861年	大棟	脚：入八双・流水	流水	推定
18	不明		大棟	肩：木鼻付、脚：入八双	渦若葉	二王門
19	大日寺客殿	文久元・1861年	大棟	脚：二股	雲水	判明
20	不明		唐破風棟	脚：二股	渦文	唐棟門
21	不明		唐破風棟	脚：入八双・波頭	流水	
22	羽黒神社本殿	元治元・1864年	大棟	脚：二股	渦若葉	推定
23	不明		大棟	脚：二股(切り込み無)	渦若葉	羽黒神社本殿に類似
24	不明		大棟	脚：二股(切り込み無)	渦若葉	羽黒神社本殿に類似
25	駒形神社拝殿	明治6・1873年	大棟	脚：二股・渦若葉	渦若葉	判明
26	鹿島神社拝殿	明治16・1883年	大棟	脚：入八双・渦若葉	渦若葉	推定
27	不明		大棟	脚：入八双・渦若葉	渦若葉	鹿島神社拝殿に類似
28	熊倉神社本殿	明治21・1888年	大棟	脚：二股・雲	雲水	判明
29	熊倉神社拝殿	明治23・1890年	大棟	脚：二股・雲	雲水	判明
30	宇佐八幡神社拝殿	明治23・1890年	唐破風棟	脚：二股両渦文	雲水	推定
31	不明		唐破風棟	脚：二股渦文	雲水	宇佐八幡神社に類似
32	不明		唐破風棟	脚：二股渦文	雲水	宇佐八幡神社に類似
33	諏訪神社拝殿		唐破風棟	脚：二股両渦文	雲水	判明

横田家大工文書における鬼板絵様がどの社寺のものであるか不明であるもののうち、他の部位の様式や立面図全体の形式などによって以下のものの名称が推定される。

図4-1は海老虹梁の渦文から判断すれば菅谷神社本殿、図4-2は虹梁の渦文から判断すれば普賢寺山門、図4-15は墓股の様式から判断すれば子歙倉神社本殿、図4-16・17は懸魚の様式から判断すれば満福寺鐘楼鬼板とそれぞれ推定される。さらに図4-22は

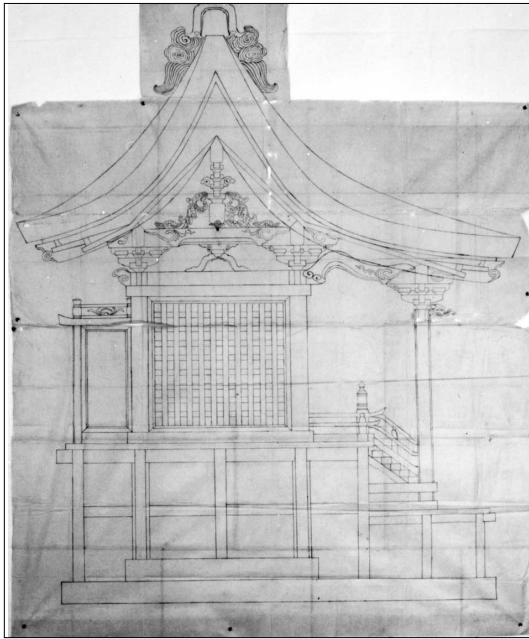


図4-1 菅谷神社本殿（推定）

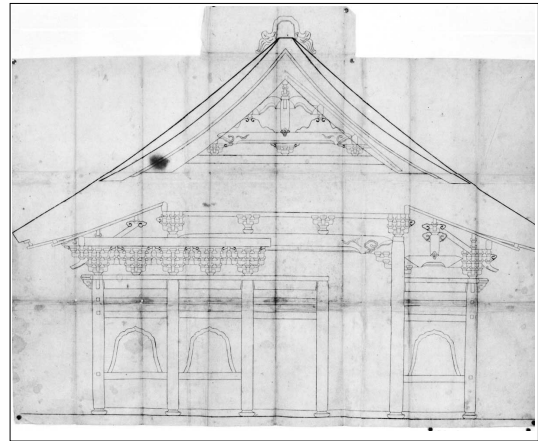


図4-4 不明（方五間仏殿）

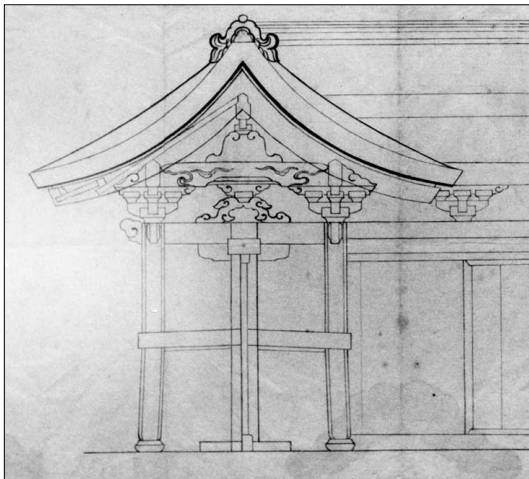


図4-2 普賢寺山門（推定）

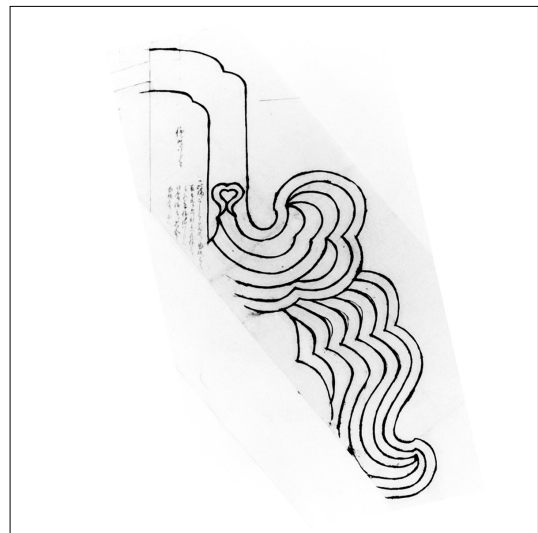


図4-5 不明（菅谷神社本殿に類似）

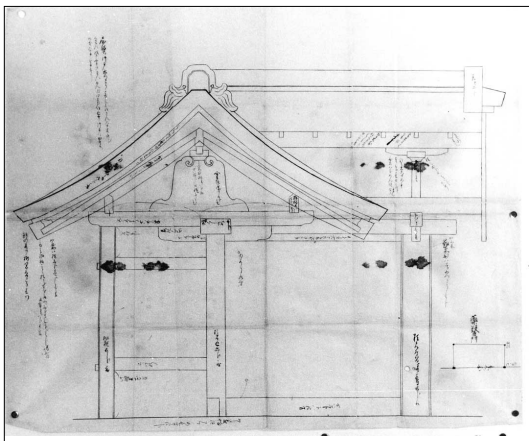


図4-3 不明（薬医門）

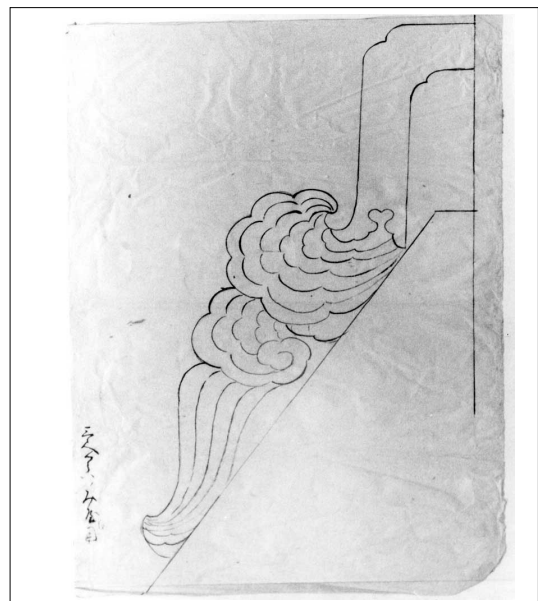


図4-6 不明（菅谷神社本殿に類似）

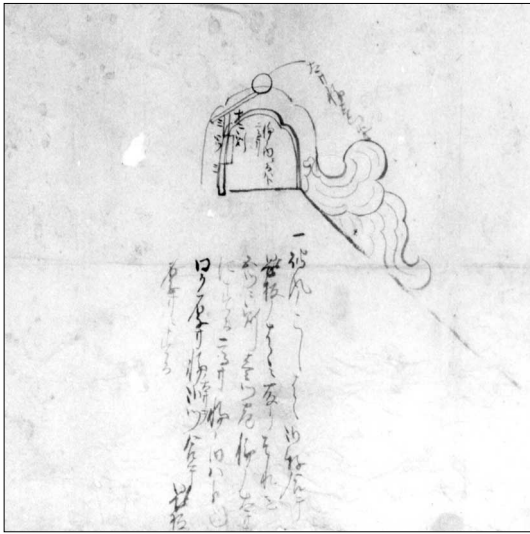


図4-7 不明（菅谷神社本殿に類似）

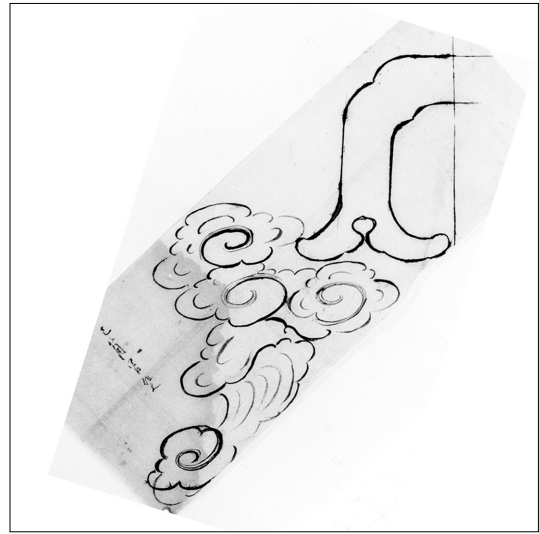


図4-10 不明（湯沢神社本殿に類似）

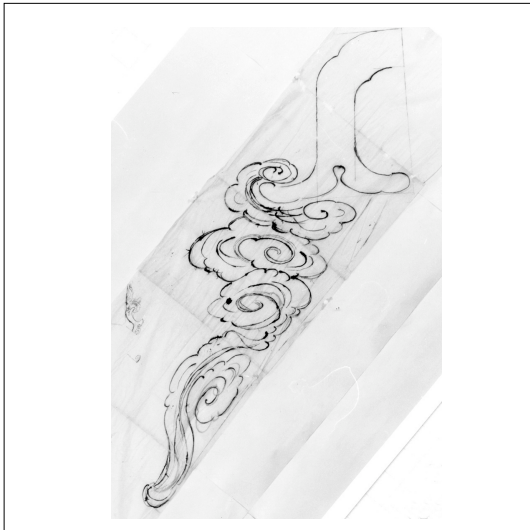


図4-8 湯沢神社本殿鬼板（判明）

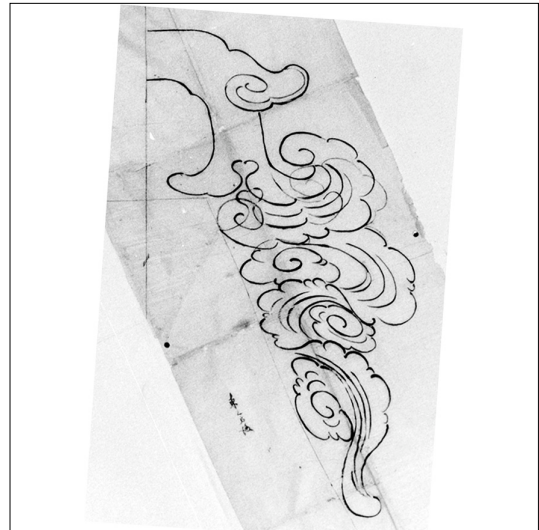


図4-11 不明（湯沢神社本殿に類似）

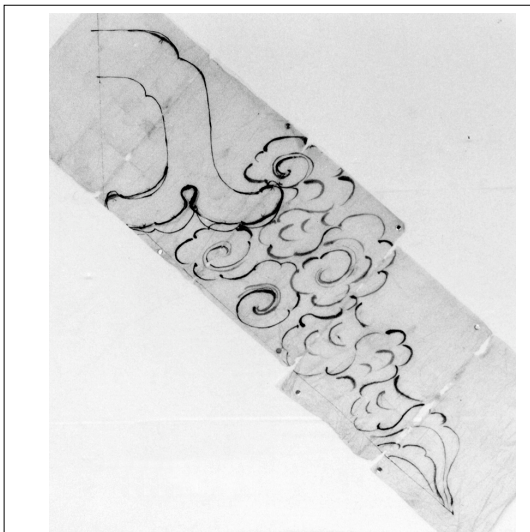


図4-9 不明（湯沢神社本殿鬼板に類似）



図4-12 菅船神社本殿鬼板（判明）

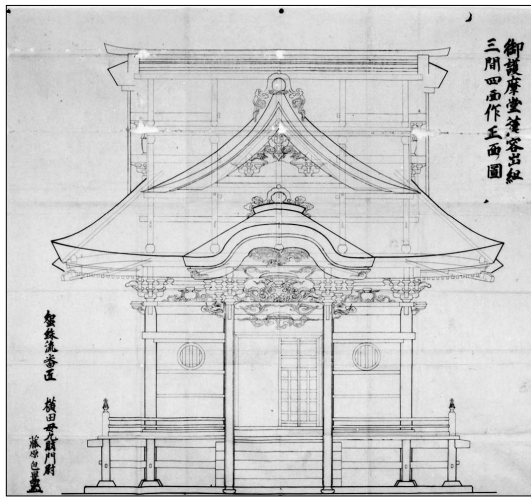


図4-13 御護魔堂 (判明)

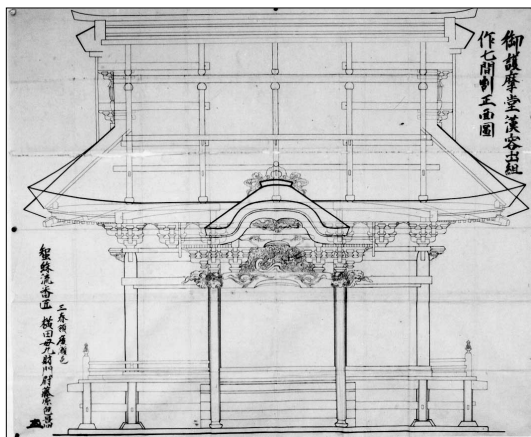


図4-14 御護魔堂 (判明)

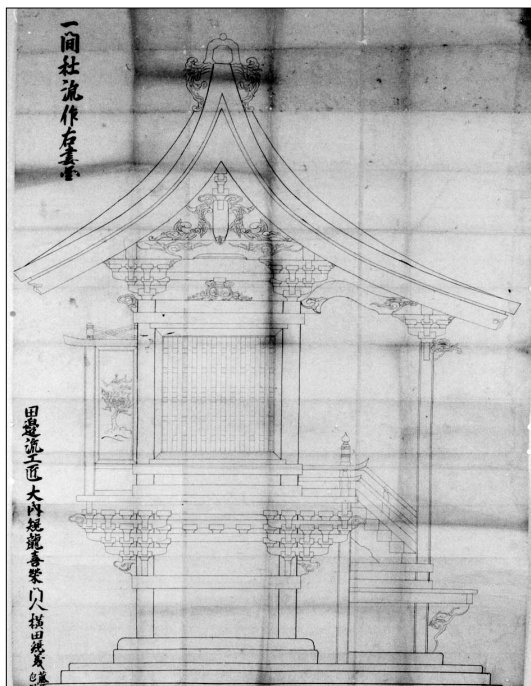


図4-15 子鋤倉神社本殿 (判明)

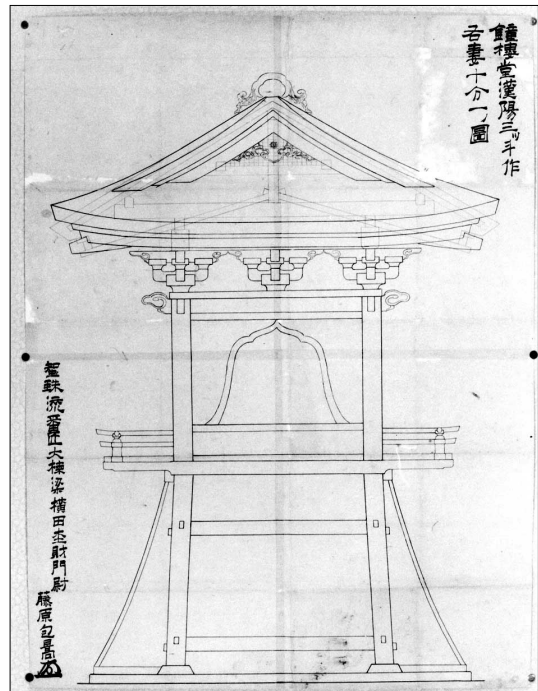


図4-16 満福寺鐘樓 (推定)

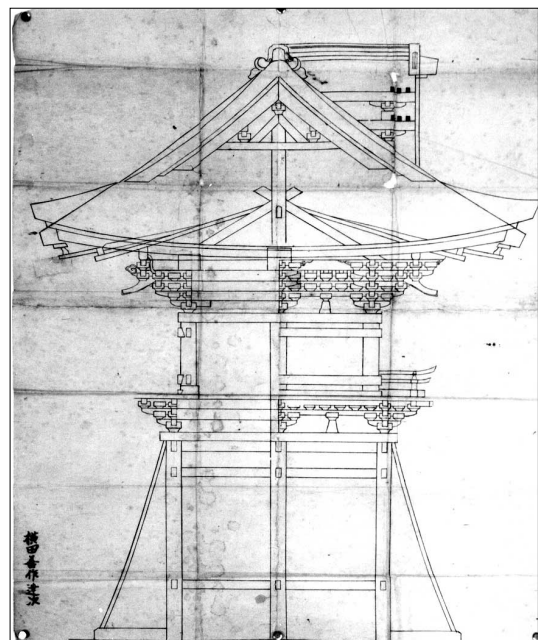


図4-17 満福寺鐘樓 (推定)

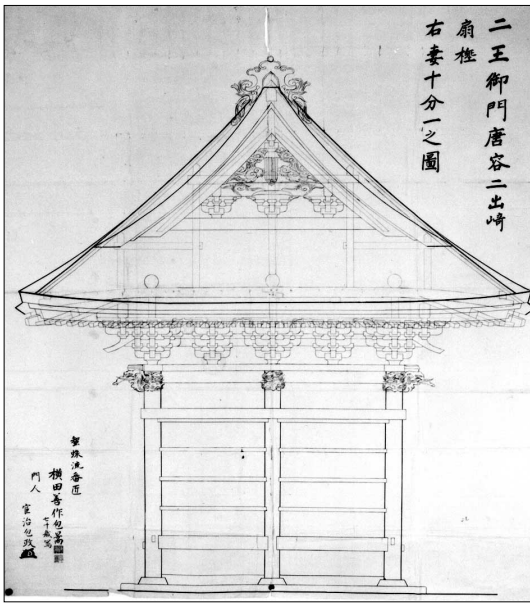


図4-18 不明(二王御門)

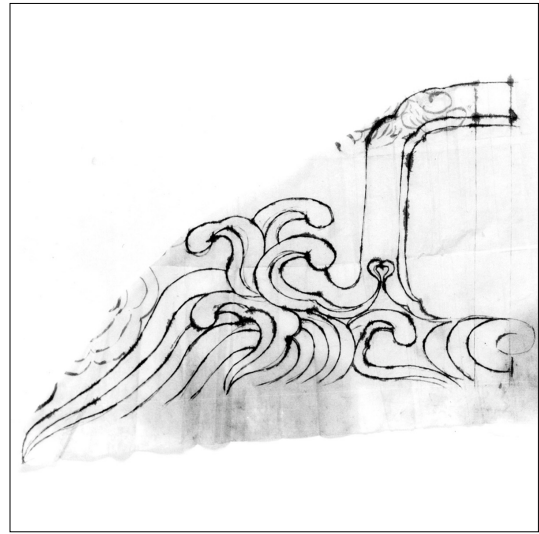


図4-21 不明

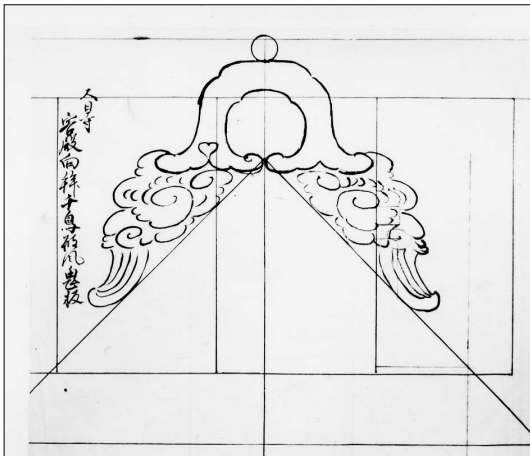


図4-19 大日寺本堂(判明)

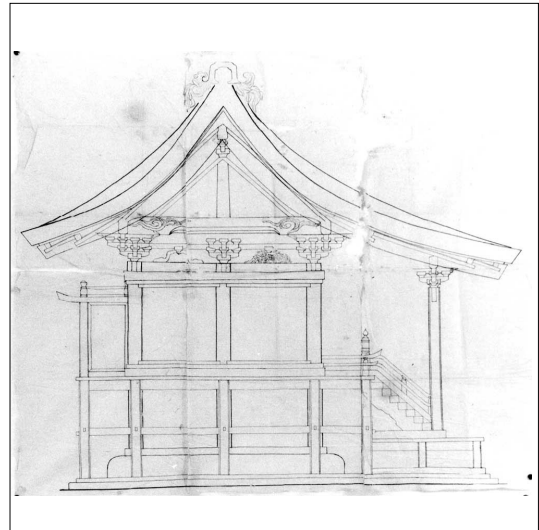


図4-22 羽黒神社本殿(推定)

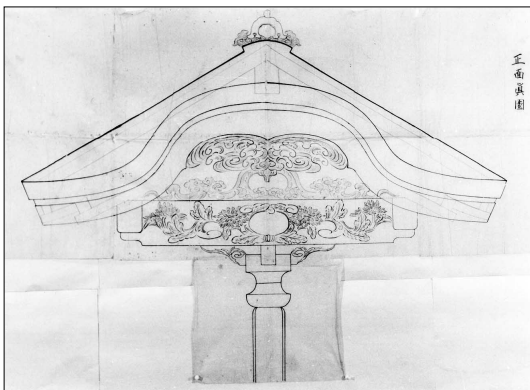


図4-20 不明(唐棟門)

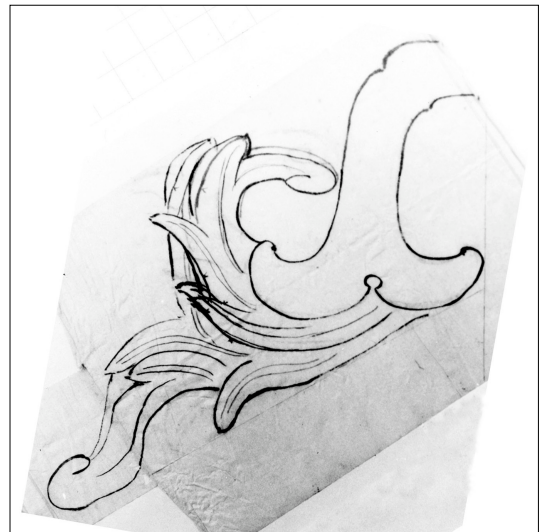


図4-23 不明(羽黒神社本殿に類似)

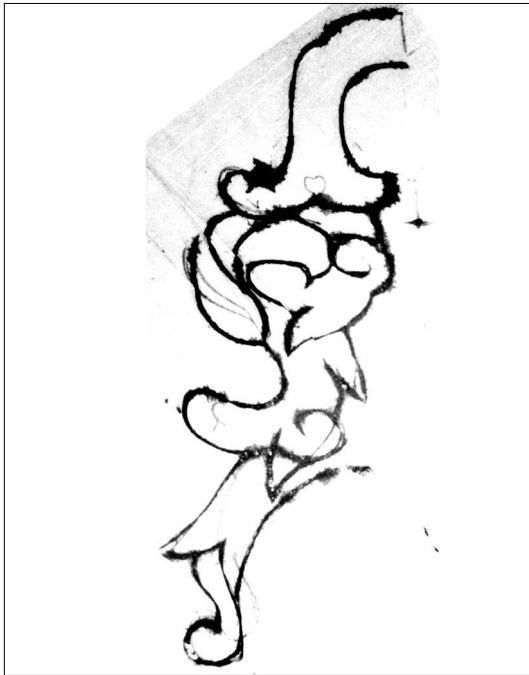


図 4-24 不明 (羽黒神社本殿に類似)

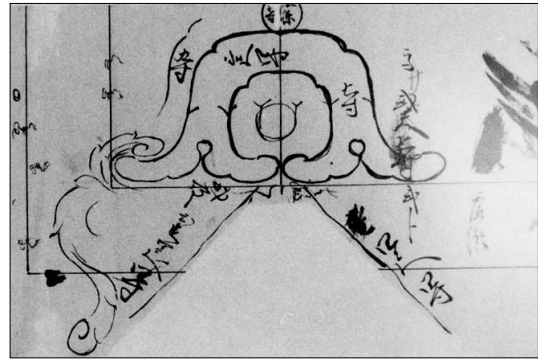


図 4-27 不明 (鹿島神社拝殿に類似)

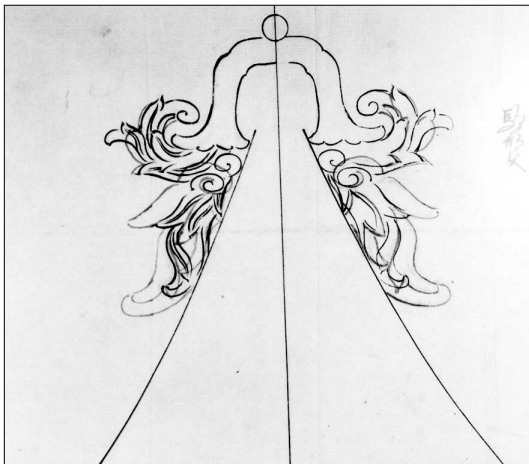


図 4-25 駒形神社本殿鬼板 (判明)

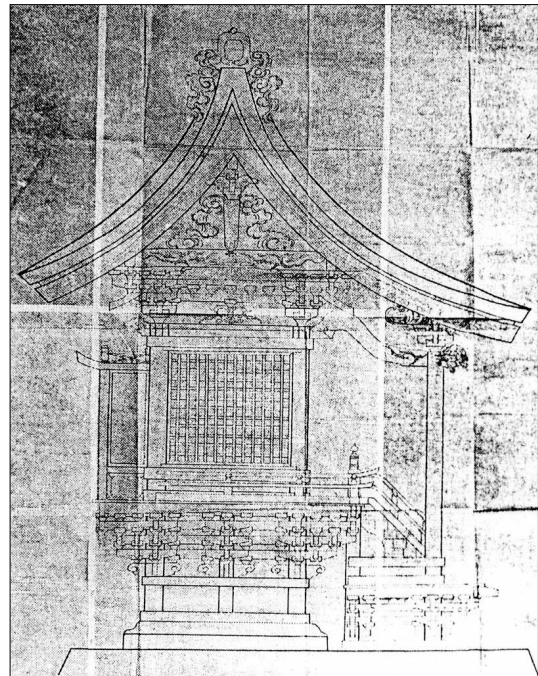


図 4-28 熊倉神社本殿 (判明)

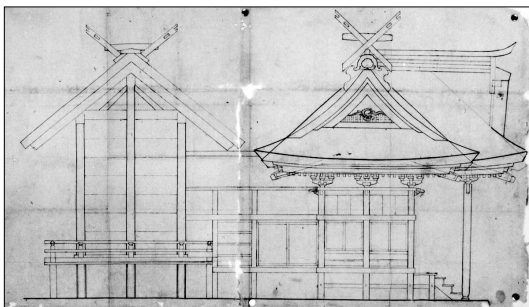


図 4-26 鹿島神社本殿・拝殿 (推定)

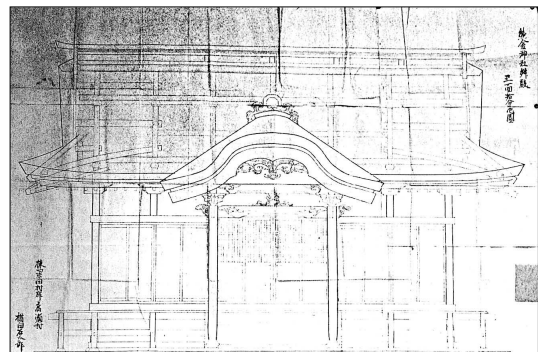


図 4-29 熊倉神社拝殿 (判明)

側面が2間あり、規模および格式から判断すれば羽黒神社本殿、図4-26は本殿拝殿の形式から判断すれば鹿島神社本殿、図4-30は懸魚の様式から判断すれば宇佐八幡神社拝殿と推定される。

また横田家大工文書における鬼板絵様がどの社寺のものであるか不明であるものうち、同書で判明・推定した鬼板絵様と比較したとき、類似しているものをあげれば以下のようなものがある。

図4-5～7は菅谷神社本殿の鬼板に、図4-9～11は湯沢神社本殿の鬼板に類似している。図4-23・24は羽黒神社本殿の鬼板に、図4-31・32は宇佐八幡神社拝殿の鬼板にそれぞれ類似している。

このように横田家大工文書における鬼板絵様を同定した結果、鬼板の変遷を明らかにすることができた。この変遷をみると、大きく分けて2つのタイプがあるといえよう。

第1のタイプは、鬼板脚元と鰭の区別が明確であり、鰭の意匠は単純な流水または菊葉となっている。

第2のタイプは、鬼板脚元と鰭が一体化したものであり、鰭の意匠は天象系の雲または雲水のものや植物系の菊葉および天象系と植物系が複合した渦若葉のものがある。

鰭の意匠を概観すると、初期に簡素な流水および菊葉の意匠があり、その後全体として雲または雲水の意匠が一般的になり、特に幕末期において渦若葉が集中的に鰭のデザインとして用いられたと考えられる。

ところで横田家大工文書における鬼板と大工雛形書における鬼板と比較すると次のように類似した例をみつけることができる。

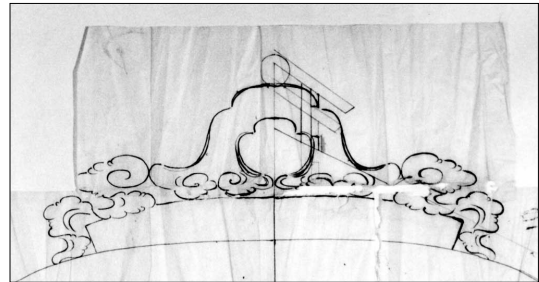


図4-30 宇佐八幡神社拝殿（推定）

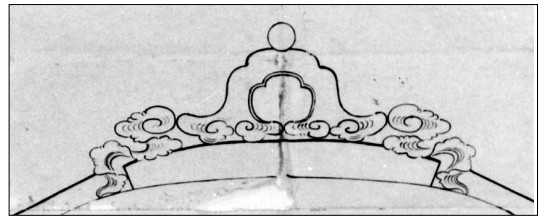


図4-31 不明（宇佐八幡神社拝殿に類似）

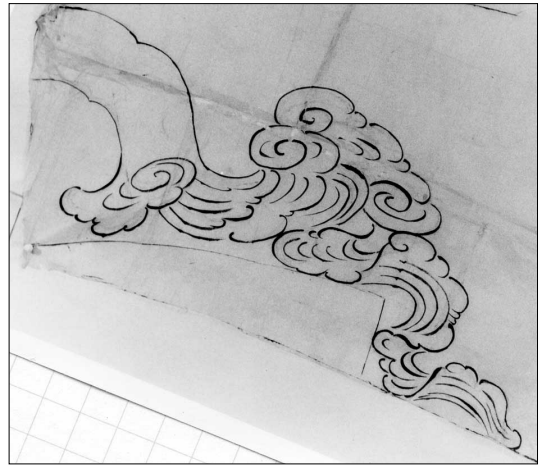


図4-32 不明（宇佐八幡神社拝殿に類似）

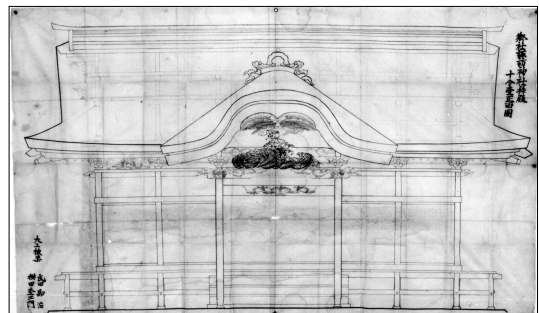


図4-33 諏訪神社拝殿（判明）

図4-5～7は、大匠雛形（1714年）の図2-2・12に、湯沢神社本殿鬼板（1797年）の図4-8は大和絵様集（1763年）の図2-21に、菅船神社本殿鬼板（1817年）の図4-12は新撰雛形（1759年）の図2-15に、駒形神社本殿鬼板（1873年）の図4-25は雑工雛形（1850年）の図2-42にそれぞれ類似していることがわかる。

このように横田氏の鬼板鱗の意匠は、ほとんどが、大工雛形書の枠の中におさまっていて、横田氏が大工雛形書を手本にして鬼板をデザインしていたことが窺われる。

## 5. おわりに

これまでの考察を要約すると、以下のようになる。

- (1) 鬼板絵様を分類するには、鬼板が取り付けられる位置と鬼板の形態および鱗意匠の主題（モチーフ）に分けて考える必要がある。
- (2) 木割書にみる鬼板は、鬼板鱗付加型から鬼板脚先鱗一体型へさらに鬼板鱗一体型へと大きく変化した。
- (3) 『新撰雛形』では鬼板の意匠に新奇なデザインがみられ、『大和絵様集』では鱗意匠に多様性がみられ、『大工絵様雑工雛形』では他の木割書と比較して鬼板の意匠が優れている。
- (4) 横田氏の建築作品における鬼板は後世取り替えられたものが多く、現存する資料数が少なく、鬼板絵様の変遷を把握することは極めて困難である。ただし鱗の意匠として雲水のデザインが主流であったことを指摘することはできる。
- (5) 横田家大工文書における鬼板鱗の意匠をみると、第1期（18世紀中期）に渦巻・流水および菊葉、第2期（18世紀後期～19世紀中期）に雲水、第3期（幕末～明治初期）に渦若葉、第4期（19世紀後期）に再び雲水が主流となったことがわかる。
- (6) 横田氏の鬼板の意匠は、オリジナルなものはほとんどみられず、公刊された大工雛形書を手本にしてデザインされていたと考えられる。

## 注記

- (1) 拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の虹梁絵様について—横田家大工文書の研究（4）—」共栄学園短期大学研究紀要、第15号、1999年3月  
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の木鼻絵様について—横田家大工文書の研究（5）—」共栄学園短期大学研究紀要、第16号、2000年3月  
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の墓股・笄形絵様について—横田家大工文書の研究（6）—」共栄学園短期大学研究紀要、第17号、2001年3月  
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の懸魚絵様について—横田家大工文書の研究（7）—」



共栄学園短期大学研究紀要、第18号、2002年3月

- (2) 「匠家絵様集」「大工絵様雑工雛形」の鬼板絵様は麓和善編著『日本建築古典叢書第9巻』（大龍堂、1991年）から抜粋した。
- (3) 麓和善・鈴木規夫・岡本真理子・河田克博・内藤昌「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」（『建築史学』第14号、1990年3月）pp.94